

漱石『三四郎』の小泉八雲

Junko Higasa 2014.12.24

『大学の講義はつまらんなあ』と云ったポンチ画の男は、三四郎と池の周りを散歩しながら『死んだ小泉八雲先生は教員室へ這入るのが嫌きらいで講義が済むといつでもこの周囲をぐるぐる廻ってあるいたんだと、あたかも小泉先生に教わった様な事を云った。何故控室へ這入らなかったのだろうか」と三四郎が尋ねたら、「そりゃ当たり前ださ。第一彼等の講義を聞いても解るじゃないか。話せるものは一人もいやしない」と手痛い事ひどを平気で云ったには三四郎も驚いた』このポンチ画の男は佐々木与次郎という。

小泉八雲といえば、東大の英文学講義における漱石の前任者で、解任時に留任運動が起こったほど学生の信望が厚く、それがために漱石への反発があったようだが、この作中では与次郎は三四郎が発言の意味を尋ねるごとに、やたら「希臘語さ」という返答をする。英語で「It is all Greek to me=私には全くギリシャ語(ちんぷんかんぷん)です」というが、小泉八雲はギリシャ出身の日本民族研究者で、日本の良さを欧米に広めた。与次郎も西洋人でなく日本人の教授を推薦する運動をしている。それを合わせると、「話せるものは一人もいない」というのは「小泉八雲のように英語を話せる者、日本の良さを話せる者は一人もいない」ともとれる。西洋化に傾きながら西洋を知らない最高学府への一言かもしれない。